



肺を守ってがんを治す時代の到来

呼吸器外科 部長
塩谷 俊雄

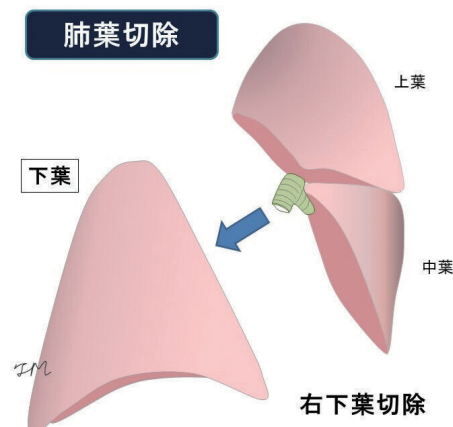


■肺がん手術において求められる新たな治療目標

平均寿命の延長に伴い、肺がん手術後の人生も長くなっています。そのため現在の肺がん手術では、単にがんを切除するだけでなく、術後の正常な肺を可能な限り残し、日常生活の質（QOL）を保つこと、すなわち健康寿命をいかに延ばすかが重要となっています。

■早期肺がんの増加と治療の変化

検診の普及やCTなど画像診断機器の進歩により、小型の早期肺がんが発見される機会が増えています。従来、肺がん手術は肺葉を切除する「肺葉切除」（図1）が標準とされてきましたが、日本および米国での大規模臨床試験により、末梢小型肺がんに対しては「縮小手術」でも同等の治療成績を得られることが示されました。これにより、肺をできるだけ残す治療が新たな選択肢として広く認識されています。



（図1）肺葉切除

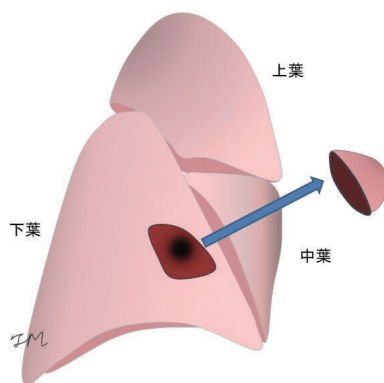
■縮小手術の実際 — 部分切除と区域切除

部分切除は、主に肺表面の小さな病変に適した術式で、比較的小さな性質のがんが対象となります（図2）。一方、区域切除はより精密な切除が可能で、単純なものから複雑なものまで様々な手技があります（図3）。

当院では、難易度の高い複雑区域切除にも対応しており、症例ごとに腫瘍の性状や肺機能を総合的に評価し、最適な術式を選択しています。

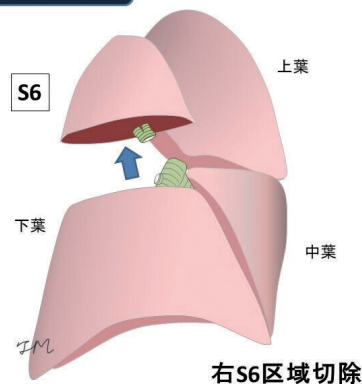
このように縮小手術は、単に切除範囲を小さくするだけでなく、がんの根治性を保ちながら肺機能を温存することを目的とした、現在の早期肺がん治療における重要な選択肢となっています。

部分切除



（図2）部分切除

区域切除



（図3）区域切除

■当院の取り組みと地域連携

当院では、「がんを治す」と同時に「肺を守る」医療を重視し、早期肺がんに対する縮小手術を積極的に行っています。今後も地域の先生方と連携しながら、患者さんを安心してご紹介いただける医療体制の充実に努めてまいります。

早期肺がんが疑われる症例がございましたら、ぜひ当院へご紹介ください。